

法に心身を 捧げるなら、 法のほうから やってくる。

昭和三十九年の大晦日、仏の教えをアメリカに伝える——という誓いを胸に、若き禅僧・嶋野榮道師はニューヨーク・ケネディ空港に立った。渡米当初、自らの思いを熱く語る若き禅僧に、あるアメリカ人は言った。「ハドソン川の水が澄んでも、アメリカに禅寺が建つことはないだろう」。それから四十三年、円熟した老師となった嶋野師は、言葉と文化の壁を超えてニューヨークに二つの禅堂を建立し、世界各国から訪れる人たちに禅の指導を行っている。人生に誓うものを持って歩んできた師の半世紀にわたる道のりを聞く。

ニューヨーク大菩薩禅堂師家 嶋野 榮道

しまの・えいどう 昭和7年東京生まれ。平林僧堂、龍澤僧堂で修行の後、先師中川宋淵老師の命により渡米。ハワイ大学に学び、39年単身ニューヨークに渡り、43年マンハッタンにニューヨーク禅堂正法寺を、51年郊外のキャッツキルに大菩薩禅堂金剛寺を建立。47年宋淵老師に嗣法、現在両寺師家。平成16年第38回佛教伝道文化賞を受賞。

仏法普及の誓いを胸に

——仏教と禅の教えをアメリカに伝えるという誓いを胸に単身渡米されてから、半世紀近くになりますね。

嶋野 一つの間にか人生の半分以上がアメリカ暮らしになりました。

——初めてアメリカの地を踏んだのが昭和三十五年、ハワイに行かれたのでしたね。

嶋野 数え二十九の年です。台風のような雨と風の強い日でした。ヒマラヤ号という船に乗って横浜港から出航して、七日間かかって着いたのです。最初はハワイにいた禅のグループの人たちに坐禅指導をする予定で行ったのですが、坐禅の会は週に二度ぐらいしかない。勧められる人があって、ハワイ大学で勉強を始めました。

その時偶然に大学の図書館でアーノルド・トインビーの本に出合いましたね。そこに「二十世紀最大の出来事は仏法東漸であろう」と書かれているのを見つけたのです。

私は、うーんと唸ってしまいました。インドから中国を経て日本に至った仏法がさらに東漸するとすると、それはアメリカに至ります。もしかしら、ハワイよりもさらに東のアメリカ本土

は何も聞かない。この時、私はこの老師の元でなら修行できると思いました。ぞっこん惚れ込んでしまったのです。以来私は、趣味は中川宋淵と言っています(笑)。

当時の龍澤寺にはまだ山本玄峰老師もご健在で、まさに黄金時代でした。玄峰老師は私がハワイに行った翌年に九十六歳でお亡くなりになります。ハワイに行く前に私は部屋に呼ばれましてね。背中を向けて坐れ、と言うのです。

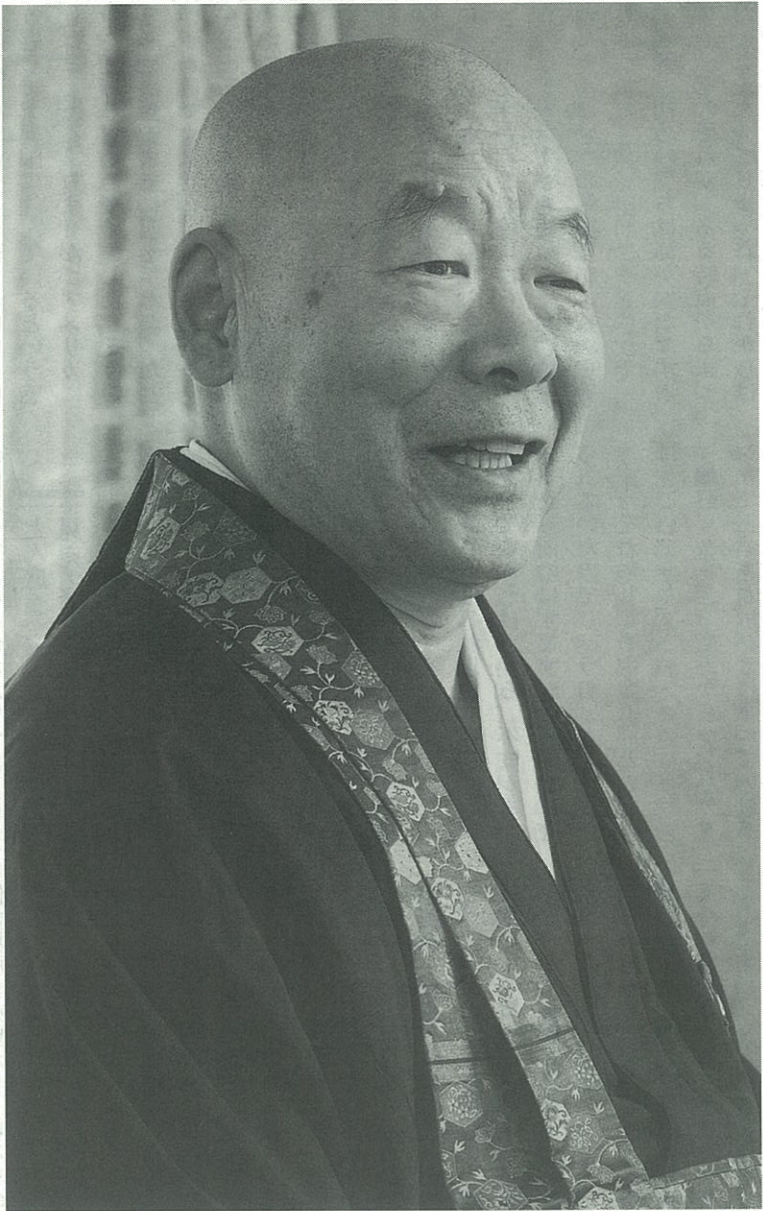
何をするのかと思つたら、手拭いを私の頭に載せて、真言を唱えながら頭を撫で、肩を揉んでくれたのです。そして、「とにかく身体に気をつけて、向こうの人と仲良くやるんだぞ」と。続けて「おまえの肩を揉んだということは誰にも言うなよ」と言われました。

——いいお話です。

嶋野 ありがたかったですね。宋淵老師がアメリカ行きを勧めてくださいださり私自身も若かったことから、こは一つチャレンジしてみよう、という気持ちになったのです。

——若い血がたぎられたのでしょうか。

嶋野 ところが、実際に一人アメリカに渡ってみると、非常に日本が恋し



に行くことが私に与えられた使命なのではないかと感じたのです。

そこで私はいったん帰国して、師匠である中川宋淵老師に相談したのです。すると老師はこう言われました。

「日本には偉いお坊さんはいっぱいるから、あなた一人いなくなっても少しも困らない。しかし、アメリカでは日本の禅僧が来て一緒に坐ってくれる

ことを干天に慈雨を待つが如く待つてゐるのだよ」

この師匠のひと言で、私はアメリカ行きを決断したのです。

——中川宋淵という方は、嶋野老師が生涯師と仰がれた方ですね。

嶋野 宋淵老師にお会いしたのは数え二十三年の年、老師はそのとき三島の龍澤寺のご住職を務めておられ、四十

八歳でした。初めて顔を合わせた時、老師は「あなたはどこから来ましたか」と質問されました。これは答えるのが難しい質問なんです。

老師は私の生まれ故郷を聞いているわけではないし、暮らしていた場所を聞いているわけでもない。私は何とも答えようがなくて、黙ったままでいました。すると老師も老師で、それ以上